

1 足に症状が多い3つの理由

日常診療で、足に症状を訴える患者は多い。これには、大きく3つの理由があり、人間が人間である所以でもある、常時直立二足歩行が強く関与している。

1 足は遠くにありて、全身を写す鏡である

まず、第一に足は最も遠い辺境の地にあり、中心である脳や心臓から非常に離れている。神経の中核と言えば大脳であるが、脳から脊髄を経て足に至る神経は、最も長い経路を辿るばかりでなく、多くの難所を乗り越えなければならない。その間、全身の障害を抱え込む結果、足にいろいろな症状を起こす。これは、糖尿病神経症が足に症状を初発し、多くの症状を呈することを考えれば、明らかである。

また、循環器の中心である心臓からも足は遠く離れている。その上、直立二足歩行を行うために、足の血流は1m以上の落差を乗り越えなければならない。酸素や栄養の補給、炭酸ガスや老廃物の回収を考えれば、循環器疾患はまず足に症状を起こすのも無理はない。

昔風に言えば、「伸び過ぎた兵站線」は、足に過酷な戦いを強いている。

2 二足歩行は疲れる

第二の理由は、人間が動物、「動く物」であり、足が動くための直立二足歩行に特化したためである。人間は動物として一生涯、足を使い動き続ける。他の動物が四脚で動くのに対して、人間は同じ働きを二足でこなさなければならない。4人分の仕事を2人でやるのであるから、疲れるのは当たり前で、過労から老化まで、その影響は最も負担が集中する足に最初に顕れる。

また、二本足だと、歩くどころか立つことさえ難しい。歩行のためには、体中から情報を集め、瞬時に判断して体全体の筋肉に指令を発し、姿勢を制御して、重心の位置をコントロールする作業を繰り返さなければならない。そのため、どんな体の障害も歩行に影響を与え、足の症状を起こす。

そればかりか、人間の生きる基本である、「歩く」「動く」を司る足に異常が出れば、過労や廃用を介して全身の機能低下をきたし、寝たきりとなれば、死ぬことにさえ結びつく。

3 足は外界との接点

第三に、足は最も外界と接触する部位なので、外界から影響を受ける機会が多く、骨折等の損傷を受けやすい。また、体を支え、体を動かし、外界へ力を加える接点なので、疲労や老化を生じやすい。両者が相まって、外傷、過労や老化による足の疾患が多発するので、患者の訴えには足に絡むものが多くなる。